あらえびす賞

生きていれば、なるようになるさ

北陸学院高等学校　2年　村井　愛理

「ケセラセラ」とはスペイン語で「なるようになる」という意味を持つ言葉である。明るく壮大な演奏が印象的でサビごとに全音ずつ上がる転調が開放感を演出している。曲の最高音は超高音域のｈｉＦにまで達しており、それを歌い切る男性ボーカルのパワフルさ、そしてギターの超絶タッピングなど楽器隊の演奏クオリティにも圧倒される。私は初めてこの曲を聴いた時、大きな希望を歌っている曲だなと感じた。しかし改めて歌詞を読み、その感動は別の感動によって覆された。完全な希望に満ちているようなこの曲の陰の部分が歌詞によって描かれていたのだ。例えば、「あなたの幸せを分けて欲しい。悲劇の図鑑、私ってそう。仕方ないほど自分よがり。」という部分である。他人の幸せを分けて欲しいと妬みを呟き、直後にそんな自分を自覚し卑下している。現状に満足できず、より幸せそうな人を見つけて不満をこぼす自分を「悲劇の図鑑」と比喩するのだ。その比喩の意味を考察してみる。図鑑という言葉には、「鑑」という字が含まれている。「鑑」は何かの手本や模範といった意味を持つ。すなわち、「自分は悲劇的な人間の象徴」であることを指していると推測できる。また、自分は他人の幸せをうらやましがり、分けて欲しいと願うほどに自分よがりだという皮肉まで足している。そう願ってしまう気持ちも、そんな自分を情けなく思ってしまう気持ちも非常に共感できる人間味の濃い感情だろう。もう一つ心に残ったのは、

「大人になんかなるもんじゃないけどケセラセラ。」

という歌詞だ。今私は高校生で、大人になることに対して不安はありつつも希望を抱いている。ただそれは、自由を掴めたかのようで、様々な負担や責任が伴い、生きる息苦しさからは何歳になっても逃れられないのではないかと一種の絶望のようなおもりがのしかかってくる。しかし最後の「ケセラセラ」でその重圧が少し緩和され、辛いことは命ある限り絶えないが、どうにかなるものさと励まされている気分になる。

このように明るい曲調で生きることの苦痛や鼓舞のどちらも織り交ぜ、歌

にするという矛盾が新鮮だった。しかもこの曲は、
「ケセラセラ今日も唱える。限界?上等、やってやろうか。」
という歌詞から始まる。この部分はまさに自分の弱気な心を奮い立たせようとしている。強がりな歌詞の間に弱音を挟むことで、不安定なメンタルを連想させることができる。ボーカルの歌い方に注目してみると分かりやすい強弱がついていたり、細かなテクニックが散りばめられているなど、感情の起伏を伝える巧みな表現力を窺い知ることができる。そして、それは曲調の変化などからも伝わってくる。二番のサビ前で急に今までの四拍子が三拍子に切り変わり、新しいメロディが組み込まれているのだ。曲調は大きく変わり、ボーカルの歌声も、若干荒々しさを含み、途中で電流が流れるようなバチバチという音が聞こえる。おそらくここでは激しい葛藤やもがきを表現しているのだろう。まさに感情の昂りを想像できる。

この後はサビが二回繰り返され、転調によって明るい雰囲気に戻り、最後は二番のサビ前と同じメロディが再び入る。しかし、二番サビ前の荒々しい雰囲気とは異なり、爽やかさに満ちあふれているように聴こえる。最後はボーカルだけではなく楽器隊も一緒に歌うため、孤独感が拭い去られることで仲間が寄り添ってくれているような温かさを感じられるのだろう。悲しみや苦しみの絶えない日々の中で、自分を愛することを忘れないでの語りかけてくれる曲に出会えたことが幸せだ。この曲はいつも私の背中を優しく押してくれる。なるようになるさ、と。

曲名　ケセラセラ
作詞・作曲　大森　元貴

審査員講評

あらえびす賞感想文について

人気のロックバンドMrs. GREEN APPLE のヒット曲「ケセラセラ」に心惹かれた高校2年生の筆者が、楽曲や歌詞を分析的に掘り下げ、大人へと成長しようとしている自分自身の心情と向き合いながらその魅力に迫っています。

教育長賞

バラライカとマンドリン

森田　美智子

今秋あるコンサートで、休憩時間をつかって〝プロになりたてです〟と自称する青年のマンドリン演奏を聴いた。マンドリンは合奏は聞いたことがあったが、ソロでは初めてだった。その音色を聞いて、ある記憶がよみがえった。

昭和二十年、終戦の直前私が三歳の時、父の転勤で樺太（カラフト）に住んでいた。父の仕事は、軍の施設の建設だった。住まいの宿舎は、周りに数軒の家しかない寂（さび）れた場所だったという。その頃のことを、後に母が、〝あなたは、いつも窓の側に立って外を見ていたわよ〟と話してくれた。真冬にガラス戸に手がくっついて離れないで泣いたこともあったと。それほど寒冷地だったようだ。遊び相手もいないし、そうするしかなかったのねと母は云う。二十歳で結婚して、横浜から急に辺鄙（へんぴ）な土地に来た母は、幼い頃裕福な家庭で育ったという。来客の多かった家で、祖母は母の育児は乳母にまかせきりで、そのうち年子で弟が生まれ、母親から抱かれた記憶がなく、とても寂しかったのよ、とよく話していた。知り合いのいない土地で、産後のこともあり母も辛かったのだろう、と今では察（さっ）することが出来る。私はよく叱られた。母に抱かれた記憶もない。妹が生まれた時、写真館で撮ったもんぺ姿の私は、口をぎゅっと結んで全く子供の可愛らしさのない表情だった。記憶にあるのは、暖かい部屋の中心にあった、だるまストーブと、その上のフライパンに丸ごとのせて焼いていた玉ネギの香りと、窓から見ていた荒涼とした景色だけ。

八月、終戦のはずだったのに、ソ連軍が「日ソ不可侵条約」を破棄し、樺太に攻め込んで来た。父は軍の仕事があるので、母は一人で荷物をまとめなければならない。トランクの準備も出来ていないので、窓のカーテンをはずして、オムツやミルク、着替えなどを包んだ。母は後（のち）に〝風と共に去りぬ〟のスカーレットが、布が無くて困った時、カーテンでドレスを作ったのを思い出していたのよ、と語った。映画大好きの母だった。

妹を背負って、私の手を引き大きな包みを引きずって、やっと引き揚げ船

の停泊する大泊（おおどまり）港に着き、引き揚げ船に間に合ったと云う。軍族だったから、先に通知が届いたらしい、という事を成人してから知り、気になった。民間人をまず助けるのが軍の責任だろうと思うが…とはいえ、おかげで私は今命がある。

その時から二十年が経った一九六五年、当時の娯楽の中心は映画だった。映画好きの母は、私が中学生の頃から良く映画館に連れて行ってくれた。特にフランス映画が多く、それらの映画のテーマソングにも心に残る作品が多い。〝禁じられた遊び〟などもその一つだ。今、思い返すとスタンダールの「赤と黒」などかなりの成人映画だったように思う。多くの作品を見て私も大の映画好きになった。

特に、ロシアの詩人で医者でもあった、ボリス・パステルナークの著作を原作とした、壮大な歴史絵巻とも云える映画「ドクトル・ジバゴ」が印象に残っている。また、後に気付くのだが、この物語の時代背景は、私の樺太時代と重なる部分もあるのです。

ドクトル・ジバゴの始めのシーンは、ロシア式の葬儀の様子。五歳くらいの少年の母が亡くなって、その埋葬シーン。そして、その次の場面を見た時、私は自分の幼い頃の記憶が蘇ったのでした。

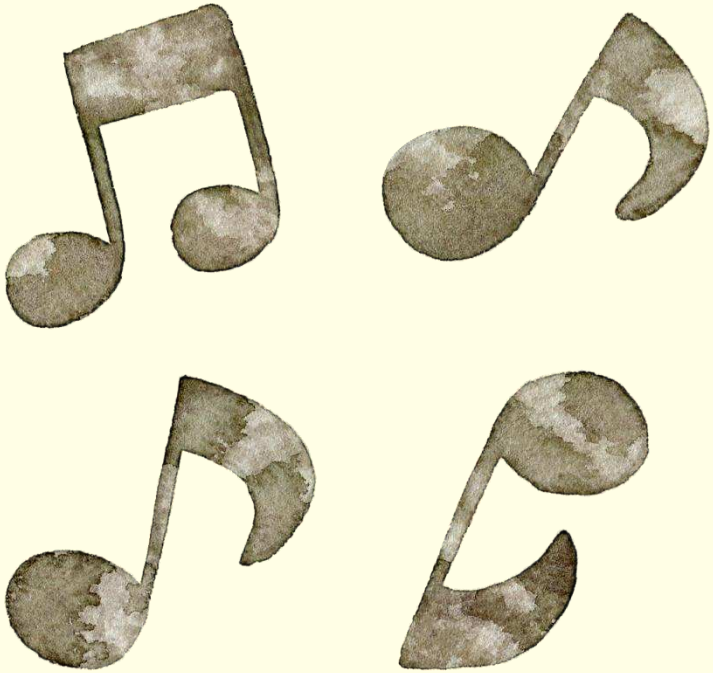
葬儀の後、一人になった少年（後のジバゴ先生）は、何もない簡素な部屋で窓辺に立って外を見ている。窓外には荒野が広がり、窓ガラスに枯枝が当たり、カタカタと物哀しい音が聞こえる。まさしく記憶の中の樺太のあの宿舎の窓から日々見つめていた心象風景だと思った。壁には、バラライカが、ポツンと掛けてある。この楽器が、これから物語の大切な役割を荷ってゆくのですが。

幼い頃の記憶と、映画の中の大切な場面で流れる「ララのテーマ」とが結びつき、それ以来忘れられない曲になっている。演奏の中ではバラライカの音色が哀愁を帯びて、複雑な曲ではないのに深い。ロシア民謡の多くにも共通する短音階のメロディーが、日本人の好むことの多い音色に共通しているのだろうか。

今回、五十年以上経っているのに、たまたま聞いたマンドリンの音で、「ララのテーマ」を思い起こした。

諸々のことは忘れ去っても、音楽と共にある思いは、記憶の奥深くに刻まれるのだな、としみじみ思ったことでした。

曲名　ララのテーマ
作曲　モーリス・ジャール



優秀賞

生涯聞くであろう旋律に

橘　政光

遺跡調査の目的で、秋田県鹿角市に行くことになった。八戸から鹿角までは、高速道を使用すれば、一時間程度。だが、高速料金の件も考えて、今回は一般道を通ると決めた。

適当にラジオを掛けながら走行するが、山間部に入ると、そもそも電波が届かない。一時停止してダッシュボードを探ると、１枚のＣＤが出てきた。何も考えずに、ケースからＣＤを取り出してセットした。映画音楽を主体とした、ギターとチェロ、ヴァイオリンを使用した演奏で、「五十嵐カルテット」とＣＤケースには記載があった。

ＣＤには四曲までしか収録されておらず、全てが映画音楽であった。最後の曲であった。流れた曲は、後々、調べて分かったのだが「Nuovo cinema paradiso」。ニュー・シネマ・パラダイスで流れてるＢＧＭを総集編のような形で上手く繋ぎ合わせて、作成されていた。

脳内で、昔、映画をビデオで見た時のＢＧＭに対応するシーンが次々と走馬灯の様に流れてきた。

と同時に、今現在の懸案について、種々、考えが及んだ。娘や息子の件である。

中でも、娘は、進学校と称される高校に入学した。だが、今は休学している。

中学校では、それなりに目立ち、それ程、勉強しなくても理解が早いためかテストでも点数は確かに悪くはない。となれば、中学の先生方も地域の進学校への進学を勧める。無事に合格して部活動も熱心にしていたが、晩秋に差し掛かった時から、休みがちに。色々と聞いてみれば、二日に一回は小テストがあり、皆が皆、夜通しで勉強しているらしく、どうも浮いているそう。試にテストの問題を見ると、二年の時に勉強する単元を一年の後半で勉強している感じでもあり、私自身、驚愕した記憶がある。

現在は、休学中で、今後の進路や将来の夢等を、真剣に考えている。

ただ、親としては、学校に行っていない事実は、やはり堪(こた)える。早目に何らかの手を打ちたいが、そもそも、当の本人が、その気にならなければ、どうにもならない。

現在の受験制度も、今から三十年前の私の時代と、そう大差はないようだ。制度自体に愕然としながらも、ある程度流れに乗らなければ、拙いのでは？との私自身の葛藤も、当然あった。

そんな時に、このニュー・シネマ・パラダイスが流れてきた。

曲の後半は、映画のラストに流れる「愛のテーマ」という曲。映画では、第二次大戦中に、イタリアで禁止されていた映画のキスシーンだけを、繋ぎ合わせた部分を、映画監督になった主人公が鑑賞する場面、クライマックスシーンで流れる曲だ。

五十嵐カルテットが演奏する、「愛のテーマ」も、この「Nuovo Cinema Paradiso」のクライマックスとなっている。

この曲を聞きながら、昔と変わらない現在の受験制度が連綿と継続している現実と、現在の受験制度にそぐわない娘を始めとした多くの方々の心情を考えるに至った。涙が溢れ出てきた。

涙が溢れ出た理由は分からない。ただ、自分なりに考えれば、「愛のテーマ」とは言うものの、私にとっては、愛とは少し趣きを異にした、むしろ、生きている間に誰しも遭遇する、目を背きたくなる厳しい現実に対しても、絶対に解決策はあるとの励ましの音楽に聞こえてきたためなのかも知れない。

また、それは、自分自身の半生を振り返る切っ掛けにもなった。

これまで、転職もせずに同じ仕事を繰り返してよかったのか？　子供が生まれてから、子供らと真摯に向き合い、共に勉強や読書をしたりする姿勢に不備はなかったか？　ニュー・シネマ・パラダイスの主人公のように、「都市に行き、成功を掴め。故郷（シチリア島）のことは忘れよ」との恩師の言葉を真に受けて、就職先を東京に求めるべきであったか？　等々。

同じ枢軸国側の国の第二次大戦直後が舞台設定になっている等、戦後復興に関しては同様の歴史を辿ったイタリアに対するシンパシーも当然、心中にあったのであろう。

ただ、幾度となく、この「ニュー・シネマ・パラダイス」を聞いている内に、思ったことが何点かあった。

その一つに〝現状で何等かの解決策を見出さなければならず、そして、その作業は決して困難を伴う作業ではない〟こと。

誰しも〝今の人生で本当によいのか？〟と思い悩む時が来ると想像する。そんな時は、この「ニュー・シネマ・パラダイス」をネットででもよいので、聞いてほしい。解決策は直ぐには浮かばない。だが、解決策に至る道筋は、朧気ながら見えてくる――。

映画そのものも秀逸だが、映画音楽部門で多数の賞を受賞した背景には、そんな人生哲学的な細やかな部分を、音楽で表現し切ったからなのかも知れない。

今後も、聞き続けるであろう、この曲、「ニュー・シネマ・パラダイス」は、私にとって一生もののメロディーになると想像される。

曲名　ニュー・シネマ・パラダイス
作曲　エンニオ・モリコーネ

優秀賞

私を囲むもの～時と景色と感情と～

江口　万葉

近年の J-POP で世界進出するものの多くがアップテンポのような気がする。また、楽曲の評価が歌詞や旋律から歌唱力へと変化していると感じる。実際私自身もアップテンポの曲も聞くし、テクニックのある歌手の歌声にうっとりすることもある。しかし、魂をぶつけるような、言葉を大切に紡ぐような、寄り添うような曲も同様に、あるいはそれ以上に好んでいる。「Time View～果てなく続く道～」もその曲の一つである。

正直なところ、なぜ、いつこの曲に出会ったか全く記憶にない。いわゆる推しでもなければ、歌番組などで披露されたわけでもなく、謎なのだ。しかし、初めてこの曲を聞いた際に感じた、まるで文学の大作を読んだ後のような心地よい疲れと自分の心が解凍されたような感覚は鮮明に覚えている。心に浸み込むようなまっすぐな声と、一つ一つの言葉を大切にするような歌い方に乗せられた歌詞に思わず涙がこぼれた。

音楽面についてである。下ハモは多数あるが、上ハモは一回しかない。下ハモは曲に壮大感や深みを与えるのに対し、上ハモは爽やかな印象を聞き手に植え付ける。確かに下ハモは苦しみや決意表現の歌詞の箇所でその効果を遺憾なく発揮している。一方の上ハモ部の歌詞は「何がしたいの？って聞かれて何も答えられない」だ。自分のことなのに夢や目標を堂々と伝えられない自らの姿が、流れに身を任せるばかりで本質を失っているように映ったのだろう。そんな不安定さが唯一の上ハモという特殊性によって際立っている。

次に歌詞についてだが、叙事的ながら「時」と「景色」というキーワードを軸に時折感情が織り込まれている。感情がメインではないから押しつけがましさがなく、むしろ心の傷跡を撫でてくれるような温かさに繋がっている。「人に嫌でもついてくるものって何だろうと考えた時に『時』と『景色』だと思いました。人はいつも時間に追われているし、時間を見るのも何気ない景色の中です。」

作詞したメンバーの道枝駿佑の言葉だ。大事なものを見落としていた感覚

に襲われた。どん底にいても有頂天になっても時間は止まらないし、周りにはいつも景色がある。どんなに暗い闇の中にいてもその闇さえ景色だ。人は景色なしでは生きてゆけない。なぜだろう。それは一人ぼっちになったとしても孤独にならないようにするためかもしれない。景色はいつも同じではなく、同じように見える景色も微々たる変化が常に起きている。

気になる点がある。それは二つの対比である。一点目、サビとラスサビの対比であるが、一文字以外同じ歌詞なのだ。サビは「横を見れば僕がいるから」とあるように、「僕」が「君」に語りかける形態であるのに対し、ラスサビは「横を見れば君がいるから」と、「僕」が「僕」に語りかける形態である。一人ではないのだとこの言葉で気付く「不安が募って壊れそうに」なった君はどれほど安心しただろう。しかし、君への慰めの裏には僕の強がりという犠牲がある。本当はとても不安に苛まれている僕を救ってくれるのはやはり周囲の人であり、先ほど僕が救った君なのだ、という円環的関係である。そしてこの僕と君とのやり取りが今までとこれからという直線的時間の経過の中で行われていることがまた面白い。

二点目、サビ中のハレとケの対比である。サビの前半がケで、試行錯誤や多くの誤りと向き合う日々を指しており、重苦しさが主題になっている。一方の後半はハレで、成功や努力が報われた日を明るさで表している。第三者の目に付くのは結果を収めている姿やキラキラ輝いている姿であり、その過程にある苦難や困難は視界から欠落している。過程を見てくれと押し付けるのではなく、仲間のおかげで乗り越えることができたと結論付けている点に美しさを感じた。人生は日常であるケの積み重ねゆえに非日常であるハレが際立つという和の考えが根本に流れているからこそこの歌詞はこんなにも感動させるのだろう。

「これからもよろしく照れくさくてでもありがとうだけは伝えたい」

一番好きな部分だ。様々な感情の中でも最も大事で忘れてはならないものが感謝の告白である。いつも自分のそばにいてくれる大切な人。家族は勿論、友人や仲間など私たちは多くの人に支えられて生きている。思い返すと私は受け取った沢山の優しさや愛情にごくわずかな感謝しか返していない。恥ずかしい、照れくさい、言わなくても通じているだろう、そんな甘えにすがっ

ていた。今が永続するなんてありえないし、一秒後には当たり前の日常が終わってしまうかもしれない。そうなったら私は後悔しかない。伝えられるときに素直な感情を伝えること。私がこの曲から学んだことだ。まずは今から家族に伝えてこよう。今までありがとう、迷惑ばかりでごめん、これからもよろしくね、と。

曲名　Time View～果てなく続く道～
作曲　川口　進
作詞　道枝　駿佑